

＊ 研究会報告 ＊

横浜の貿易発展の歴史

ドナルド・ラップナウ（絵葉書収集家）

この報告は、下記日程にて講演されたドナルド・ラップナウ氏に原稿をお寄せいただきました。
 租界・居留地班 第60回研究会
 （ドナルド・ラップナウ氏講演会）
 日時：2018年4月24日（火）17:10-19:00
 場所：神奈川大学横浜キャンパス 3号館408室
 共催：非文字資料研究センター 租界・居留地班・人文学会
 講演：「絵葉書にみる日本と中国：1894-1945」

私は米国東海岸のニュージャージー州に住んでいますが、家から車で30分程の所にあるパターソン市は19世紀後半から20世紀初頭にかけて米国絹産業の中心地として知られた工業都市で、ここで日本から買い付けた生糸から米国人向けの絹製品を生産する織物会社が繁栄しました。今もその面影は煉瓦作りの博物館にとどめられています。20世紀の初めにパターソンの1絹商人が週末用の田舎の別荘として建てた石造りの家に現在私は妻と共に暮らしています。

1859年に横浜港が開港してから80年間の長きにわたり、日本の一番の輸出品は生糸で、アメリカは絹の大部分を日本から輸入していました。各地から大量の生糸を集めて海外に輸出するために、横浜は輸出处として大きな役割を果たし、繁栄したのです。生糸の品質検査を行うため、明治時代の初めには横浜に生糸の検査所が設けられました。ここにある2枚の絵はがきは、横浜生糸検査所の建物に手彩色した写真（写真1）と、横浜港の第4埠頭で生糸が荷積みされる様子



写真1



写真2



写真3



写真4

の写真（写真2）です。

明治時代が幕を開けた2年後、日本の先駆的な蒸気船会社が横浜と神戸の2つの港町を結ぶ定期航路を開設しました。1885年には合併によって日本郵船株式会社となり、国際的にはNYKの名で知られるようになりました。この会社は、日本最大で世界でも屈指の蒸気船会社として郵便や商品、乗客を運びました。写真は横浜港の埠頭（写真3）、横浜にある日本郵船会社の建物（写真4）、大阪商船の南海丸と航路図（写真5）で、航路図は、横浜からニュージャージー州パターソンを含むアメリカの東海岸へ生糸が運ばれたことを示しています。



写真 5



写真 9



写真 6



写真 10



写真 7



写真 11



写真 8



写真 12

古い絵はがきには、横浜で発展したその他の事業も描かれています。ここに示されているのは、日清の製粉所（写真6）、麒麟麦酒（ビール）の横浜醸造所（写真7）、1880年に馬車道通りで開業した横浜正金銀行（写真8）です。この特別な銀行は初期の貿易において重要な役割を果たし、外国為替相場が設定される前の時代に輸出入のための現金取引を行っていました。1923年に関東大震災が発生した後に緊急の課題となったのは、貿易再開のために横浜港を早期に復興させることでした。絵はがきに描かれているのは、横浜の完全な復興を祝して開催された復興記念横浜大博覧会（写真9）で、この博覧会は貿易を再び発展させる一助となりました。

手作業で着色された写真の絵はがきは、主として横浜を訪れる観光客に販売されていました。その例としてここにあげるのは、伊勢佐木町の街並み（写真10）、観光客向けの骨董店（写真11）、外国人観光客やビジネスマンが滞在したグランドホテル（写真12）等です。

私は日本の歴史の保存と、文化的、社会的、政治的な出来事によって引き起こされた変化を確認することに関心を持っています。横浜の製造業者や船会社、小売業者が、国際的な博覧会などを通じて商品やサービスを宣伝したことは、この基準に合致すると考えています。

（2018年8月15日）